

No. J2327 「ネパール大震災の民族誌 —共同性と市民性が交わる場で災害に対応する—」
国立民族学博物館 グローバル地域研究プログラム総括班 特任助教 伊東さなえ
本助成により『ネパール大震災の民族誌—共同性と市民性が交わる場で災害に対応する—』を出版した。本書は2015年ネパール大地震で被災した首都カトマンドゥ近郊農村P村における文化人類学的な調査に基づき、彼らの震災経験と復興活動を市民社会的なつながりと伝統的な共同性に着目して描出したものである。 国際開発協力により震災以前から作り出されてきた災害対策委員会や女性協同組合などのつながりは、震災後、復興活動の拠点となるとともに、国外の支援者らへも広がっていた。一方で、震災後に祭りや儀礼により「村」という共同性を構築することも人々が災害後の非日常の空間を日常の空間へと構築しなおす役割を果たした。 本書の特色は、この市民社会的なつながりと伝統的な共同性に基づくつながりが別個に存在していたわけではないことを示した点にある。震災後に祭りを開催するにあたって瓦礫の撤去が必要となった時、国外に在住する村の出身者が立ち上げたクラウド・ファンディングで集められた費用が用いられるなど、双方は重層的に絡み合い、連環しあい、曖昧に溶け合いつつも総体として「村」という場とそこにおける復興活動を形成していた。 従来の研究では、被災地のコミュニティは伝統的な村と外部の支援者たちという二分法的な枠組みで論じられがちであった。それに対し本書では、伝統的な村の内部にある市民性とそれがグローバルな市民社会ネットワークと接合していく様を描き出すことでそれらを接合した。P村における災害対応では、確かに伝統的な村を想像し、創造することが切実さをもってなされたが、一方で、外部から来たとは限らない市民社会的なものも同時に縦横に行き交ってもいた。これらを明らかにすることで、本書は、固定的で静的なイメージに陥りがちな「村」と、外部からくるものとして規定される「市民社会」の双方の境界が溶け合い、重層的に併存する場として被災地を描き出した。